

ごあいさつ

この度は第43回船橋市写真展に出品戴きまして誠にありがとうございました。

全国で1日10万人以上もの感染者が出てしまうなど、新型コロナウイルスの猛威は収まる気配を見せません。こうした中、船橋市写真展も昨年度に引き続き、今年度も大変残念ではありますが「会場開催」を自粛せざるをえませんでした。そして昨年同様、プリントによる応募、WEBによる発表という変則的な形での開催となりました。しかし、このような状況下にもかかわらず、各地から多くの写真愛好者の皆様が、心のこもった熱い力作をお寄せ下さり、本展が開催出来ましたことを心より感謝申し上げます。

2月8日には写真家の北井一夫、中里和人両先生に船橋市民ギャラリーに於いて作品審査をして戴きました。本展の特色は何と云ってもその多様性です。6歳未満の子供たちから小中学生、高校生、20歳台の若い世代の人たち、そして80歳台90歳台の元気なベテラン写真家の皆様まで、幅広い年代層から312点の個性溢れる、多様な表現スタイルの作品が一堂に審査のテーブルに並べられました。そして白熱した長時間にわたる厳正な審査の結果、40名の皆様の受賞が決定されました。なお、賞は1人1賞のため、1人で複数作が受賞候補となった場合は、審査員がその人のベストの作品を決めて下さっています。

見事入賞された皆様に心よりお祝い申し上げます。惜しくも入賞されなかった方も入落は紙一重とのことですので、次回のチャレンジをまた目指して戴きたいと思えます。この結果は2月14日から3月25日まで開催予定のWEBによる「応募作品発表」をお楽しみ戴ければ幸いです。また、今展「入賞者作品展」を2月14日(月)～20日(日)まで船橋市民ギャラリーで開催いたしますので是非ご覧戴ければ幸いです。

なお、今年度よりこの船橋市写真展の運営に、その開催場所である船橋市民ギャラリー(《公財》船橋市文化・スポーツ公社)が参画し、主催者とともに事業を行うこととなりました。これにより高い専門性、利便性を生かして大幅な事業内容の向上充実が図れることとなります。来年度の第44回船橋市写真展は、今までの良いものを生かしながら、参加者の皆様が真に写真表現を楽しみ、集い学べる場所として創意工夫し、全国に向けて新しい写真文化を船橋から発信してまいります。どうぞお楽しみに、宜しくご支援賜りますようお願いいたします。

船橋市写真連盟会長 神保 君雄

審査員 講評

昨年と同じA4プリントでの応募だったが、小さいと作品を作りやすかったのか、自分なりに工夫して上手く個性を引っ張り出したのが良かった。各部門とも上手さではなく個性を見ることが出来た。小さな子供たちも上手く成長している。カメラを向けて撮るだけだったがタイミングが良くなっている。立派な少年少女写真家が生まれそうです。年配の方々も頑張っておられる。お地蔵さんにマスクはやはり時代を捉えているのだと思う。時代を反映させどう取り組んでいるか。モノクロ写真はやや低調だった。我々の頃は、モノクロは現像液の中から浮かび上がってくるものが写真の基本だった。今は特殊な物になってしまったのか。カラーもモノクロも同じ。よく事物を見て撮って欲しい。人がやらないことをする。皆と同じではつまらない。表現する人間はどこか捻くれていた方が良い。皆が見て「何だこれは」と思う物から探すと良い。日常の中での発見。「あれっ」という発見を大事にしてほしい。プロはそれが出来ない。写真集部門は良いものが多かったが、ストーリーのために当てはめたような写真が散見される。やはり1枚ずつの写真が良いというのが基本です。沢山撮って、自分の写真を何度もよく見て欲しい。全体としては内容のある良い写真が多く面白いコンテストになったと思います。また元気に頑張ってお山写真を撮ってください。

北井 一夫

今回の応募写真には、人物、風景、オブジェクトなど、多様な対象へのアプローチが見られ、応募者の視線を追いながら楽しい審査が出来ました。中でも、家族や友人、ペットなど身近な対象への愛おしい眼差しが多かったと感じました。

カラー単写真は、非常に優れた写真が見られました。日常性と非日常性が混じり合った、浮遊感のある不思議な作品が素晴らしかったです。そこには、写真ならではの風景や人物など、対象とのセンセーショナルな出会いが見事に活かされていました。

モノクロ単写真は、全体としてエネルギーが無かったです。モノクロフィルムで撮影し印画紙に焼く過程で、対象の存在感をよく観察し、その必然性をモノクロ写真に昇華させていた流れが見られないように思われます。モノクロ部門があるので、カラー撮影した写真をモノクロ転用しては、本来のモノクロ写真の魅力は損なわれていきます。対象の存在感をよく観察する原点を大切にしてほしいです。

組写真は、写真を組むことで躍動感が増した優れた作品群になっていました。特に、余白のような遊びの感覚が見受けられ、作者の視線を体験できる喜びがありました。

写真集は、点数は少なめでしたが質は高かったです。写真集では、何をどう見て、どう撮るかという撮影の基本的なアプローチと、写真集として発想からゴールまでの里程表＝制作コンセプトが必要となります。装丁、紙選びなど、細部のデザインも年々質が上がってきています。この部門は、船橋写真展の特徴として定着してきました。

中里 和人